

はじめに (キーワード「命」)

「命」。この言葉ほど現代のキーワードになる言葉はないかもしれません。「命は大切だ」と誰もが言いながら、命が大切にされているとは言えない世の中です。いま、この本をめくってくださっているあなたも、何かしらの不安やかなしみを感じておられるかもしれませんね。

「命」には二つの側面があつて、一つは物質的な肉体の生命、一つは内面的なこころの生命、です。そのどちらも不安な現代生活と言えましょう。昨今の健康食ブームは、「便利さ」の過度の追求や価格競争などが、あやしい食品添加物や遺伝子組み換えなど動物としてのホモ・サピエンスの人体にこれまでになかった危険な兆候をもたらしていることや、「高度経済成長」「バブル経済」を経て崩壊したこの国の経済「成長神話」後の新たな価値観の模索、などを反映しているとも言えるでしょう。また、巨大な商業社会で「人と人とのこころのふれあい」の喪失が、苦しい経済状況や教育の荒廃なども相まって、さまざまな「こころの病」を生みだしています。いじめ、児童虐待、ひきこもり、家庭崩壊、正社員になれない若者の自信喪失、過度の競争社会におけるサラリーマンのストレス症状、孤独死、介護疲れからくる自殺や他殺、など。こうした暗い世の中でも、日々何とか明るく頑張つて生きておられるというのが多くの人々の実感かもしれません。「命」をキーワードにして見つめると、この社会のあり方も根本的に考え直さないといけないのではないかと言わざるをえません。

そんな世の中の閉塞感や矛盾に追い打ちをかけるように、今年二〇一一年三月十一日に東日本大震災が起きてしまいました。続けて人災と言うべき福島原発「事故」が起きました。悲惨な状況は皆さんご存じの通りです。被災地のこどもたちやお年寄りの「生きよう」という笑顔には涙が出ます。人の生命力は大ピンチにここまで強く優しくなるのか、と学ばされます。そして、彼らの生活に一日も早い希望をと思い、これからのエネルギーのあり方を根本から見直さなければいけないと強く感じます。危険な原発を続けるわけにはいかないと私は考えます。

日本中で、そして世界でも取り組まれている今回の被災者救援行動には、「命」にこころ寄せる善意の底力が発揮されていると言えましょう。この場を借りて、被災者と関係者、ボランティアの方々、こころからのお見舞いと共感のこころをおくります。その意味も兼ねて、このアンソロジーの執筆者人数を三十一名にしました。これは延べ人数ではなく、書き手の実数です。

それから、いま「自粛」すらできない生活レベルの低所得層の人々もこの列島に大勢います。ホームレスになつてしまった人たちは「街の美化」と称して追い出され、健康保険料や年金掛け金を払えない人々も大勢いて、病気になるっても経済的理由で病院に行かない人々が大勢います。

こころの危機を誰にも相談できず、ひとり思いつめて死を考える人々も大勢います。中には孤立感から人間社会全体を敵に回して犯罪に手を染めてしまう人もいます。

その周りには、そこまで深刻ではないけれども日々生きて行くのがしんどくて、こころ傷ついたまま淡々と生き続けている膨大な数の人々がいいます。

私たちはここに、「命」の詩集をお届けします。この本はノウハウ本でも教えるの書でもありません。これを読んだからといって、世の中がバラ色になるわけでもありません。

でも、ここには、命の声があります。命が軽視されているいまの世の中で、かなしみ、不安、傷を背負った存在に寄り添うこころがあります。

これは詩集です。いま、経済効率優先(実は格差社会)の日本では、詩のこころも軽視され、追いやられていると言えるでしょう。本当に大切なものは何なのか。古来、すべての文学の母であり、こころとこころが最もダイレクトに深く交信するジャンルである「詩」を通して、私たちは読者の皆さんと共に感じ、共に悩み、共に悲しみ、共に喜び、共に考え、共にすすみたいと思います。

こども（序詩と第一章）

私たち人間は全員必ず「こども」でした。親の事情はそれぞれに複雑で、いまでは体外受精なども可能になりましたが、そのようなケースも含めて、すべての人間が人間の体内から生まれてくることは変わらぬ真実です。

人間一人の一生が地球動物の進化の歴史の縮図であるということもかなりよく知られた真実ですが、「海」から「陸」へ上がり、脳を「進化」させていくこどもたちの成長過程を見ることの楽しさと同時に、幼いこどものかわいらしい瞬間を見ることが、私たち大人の大きな喜びと言えましょう。こどもはなぜこんなにかわいらしいのか。その驚嘆は、何百年も前の西洋の画家なども好んで題材にしましたし、古代『万葉集』の詩人・山上憶良がうたったこども讃歌も有名ですね。私などは自分にこどもはいませんが、どのまちでも、こどもたちひとりひとりがすぐに好きになってしまいます。かつて仕事を通じて多く接してきましたが、どのこどもたちも、交流はとても楽しいものです。そして、自分自身が大人になって忘れてしまったことなど思い出されて、はっとさせてくれるものです。彼らは「詩人」だなあと感じたりもします。

そんな世界共通の普遍的なこども讃歌がありますが、いま日本では冷たい社会の進行のしわ寄せがもろにこどもたちを襲っています。もちろん、昔は昔でこどもに苦勞はありました。戦争被害や戦後の貧しさなどです。学校に行けなかったり早くから働いたりして苦勞された方も多いことでしょう。でも、そこには同じ世代共通の苦しさの下での連帯感や、見守る地域コミュニティなどがあつたと思います。強いて比べるわけではないのですが、いまのこどもたちを襲っている状況はある意味ではもつと陰湿で深刻です。ともすると、無防備にこの世にひとりぼっちにさらされて、SOSの声さえ近所にも無視されて、虐待死してしまつてから発見されたりします。親の世代も苦しくて、経済的あるいは精神的な孤立状態で親自身が極度にストレスをためて相談相手もなく悩んでいますから、本来、社会全体の制度的な連帯が必要なのですが、この分野でもこの国はまだ遅れた状態にあると言わざるをえません。

二十一世紀を担っていくこどもたちが、それぞれに成長していける世の中にしたいたいです。

そんな現在、この「命」の詩集の始まりは、こどもたちをめぐる作品群にしました。かなり辛い現実もしっかりと収録されていますが、どの詩からも、こどもの命への願いの力が感じられるものとなっています。

序詩に選んだ高良留美子さんの「産む」は一九八三年に書かれた作品ですから、その頃生まれた人はもう二八歳になることになりました。ちなみに当時私は中学三年生でした。当時を思い出すと、世界は米ソ冷戦のただ中で、核兵器廃絶の世論が大きくなつたりもしました。アナログからデジタルへと移つて行つた時代で、校内暴力などの教育現場の荒廃なども話題になっていました。そんな時代に、こんな詩が書かれていたのです。今年二〇二一年のフクシマの事態につながる切実な詩です。ここには、女の人が大切な赤ちゃんを産むという尊い行為、そのつながりの悠久の時間が描かれています。日本海地方の風習も含まれていて、女性詩人ならではのリアルさが想像力をふくらませてくれます。しかし、そこは（原子力発電所の建つた村に／わずかにのこされた産小屋）なのです。原発と出産、ここには観念的ではない生活の実感としての危機感が出ています。（女はそうやって産み／産みつづけてきたのに、その産道は／ついに原子力発電所までつづいていたのか）という問いかけは痛切です。この詩が書かれてから二八年が過ぎたいま、この詩の告発と警告と願いと優しさがあらためて今日的に身にしみてくるではありませんか。

第一章には、さまざまな「こども」関係の詩を収録しました。生まれたばかりの赤ちゃんの様子を詩のところで見つけた空色まゆさんの「種蒔き」、序詩にも連なる命のつながりの長い時間を見つめた田中裕子さんの「光のくに」。二篇とも誕生という命の奇跡を優しい光の言葉で表現しています。共に一九六〇年代生まれの書き手が、普遍的で個人的な作品を発表しています。この光の詩二篇を、私はどこか公的なところに貼り出したいくらいです。巷にあふれる消費者を小馬鹿にした広告なんかよりも、命の真実を書いたこんな詩作品が社会に満ちたらどんなにすてきでしょう。

でも、光は暗闇の中で苦しみます。山本聖子さんの「ループ」は中学受験をする小学生の会話を聞いた作者がこどもたちのことと自分の人生などをからめて（だから進むしかない／光の輪が／くらい角を曲っていく）と考察を深めています。

こどもの権利条約にもとづく運動に関わつてきた小森香子さんの二篇はこどもたちへのメッセージがさわやかです。（叫んでみよう／自分の心を、自分の思いを／自分のことばで）。

ここから四篇、現代日本社会に起きた悲しい諸事件をリアルに描いた力作が続きます。中村純さんの「愛し続ける者たちへ」、斗沢テルオさんの「こめんねこめんね」、最近亡くなった島田陽子さんの「坊やはよい子だ」、谷崎真澄さんの「カナリアは何処か」の四篇です。幼いこどもたちが虐待されたり、餓死したり、殺害されたりした、実際の事件を書いています。

それぞれの詩は、上から目線でただ道徳的に糾弾するようなものではなく、同じ社会で生きる者として内面的に掘り下げて、被害者のこどもたちの命の側に立った、痛切な絶唱と言えましょう。「詩」というものにこれまであまり縁がなかった生活の場の多くの人たちにも、私はこの四篇をぜひ読んでもらいたいと思うのです。読んで涙ぐんだり、泣いてしまう人も多いのではないのでしょうか。そして、そんな人たちのこころの輪が、このアンソロジーを通してできればいいというのも私のささやかな願いです。

長年学校の教師をされてきた武西良和さんの「悩む子ども」では、登校拒否の子が立ち直って行くきっかけは意外にも保健室でした。

戦乱や貧しさの中にいる世界のこどもたちとの関係性を描いた市川紀久子さん、新川和江さん、瀬野としさん。障がいをもって生まれたこどもたちとお母さんのこころを描いたともさん。ついに生まれ出ることができなかった胎内の命をせつなく物語る木塚康成さん。独自の芸術手法で鮮明に誕生と出産を哲学する芳賀章内さん。縄文時代の幼子の手のひらにあったものから〈不定形の夢〉と現代の危険を考察して願いを深める若宮明彦さん。放射能の時代の花であるこどもたちをうたい、祈りや願いのうたを響かせる井上優さん、浅山泰美さん、大釜正明さん。親の視点で我が子に語りかける吉川伸幸さん、亜久津歩さん。身近な少年少女に優しく語りかける山崎清子さん、清水マサさん。少年の屈折したこころを描いた桐木平十詩子さん。さらに田尻文子さん、河野洋子さんの作品も命の大切さを強調しています。中原澄子さんの「イーハトーヴへ」は宮沢賢治の作品群へのオマージュを盛り込みながら、孫娘との不思議な想像の旅を綴った個人的な散文詩です。

仕事、世の中 〈第二章〉

さて、この社会でまず心配なのが食べていくための仕事です。いま日本の現状は生活根幹のところで大変苦しいものとなっています。「格差社会」「ワーキングプア」「派遣労働者の無権利問題」「失業」「肩たたき早期自主退職」「過労死」など、その状態は皆さんもご存じの通りです。

そんな状況の下での疎外感や反骨心、世相などを描いた詩群をこの章に収録しました。

一九八〇年生まれ植田文隆さん「青いビニールシート」のホームレスの様子は、いま日本各地のまちなかで見られる光景でしょう。大阪などは特に多いようです。一晩に何十万円も使うごくごく一部の人がいる一方で、働く場を追われたり、健康を害して商売に失敗したり、借金が返せなくなったりして路頭に迷う人々がたくさんいます。青いビニールシートに象徴されるものから目を逸らしてこの社会を考えることはできないでしょう。

まさに〈何という世の中だ／失業者は溢れ／若者に仕事がない〉という大森ちさとさんの「散って行く」状況です。また、「見たことがありますか」の〈壊れていくこころを見たことがありますか／張り詰めていたものが一瞬に流れ／ポロポロに壊れていく〉という精神的な不安も切実です。

中村花木さんの「眠れるナース」、こまつかんさんの「旋律」は病院関係の労働現場の声です。平井達也さんの「吸い殻」は〈タバコの煙が立ち込める店での／仕事しかなかったことのない／まゆちゃん〉の夢とかなしみと共感が日常生活の臨場感で親しく伝わってきます。浅井薫さんの「骨のはなし」は出稼ぎ労働者の疎外を工事建設現場などでの「事故」の冷たい扱われ方を想起させる中に刻印していますし、杉本一男さんの「水の行方」は夕張炭鉱の悲劇を描いています。小松弘愛さんの「L釘」も鋭い批評性をもって描かれています。酒井一吉さんの二篇は、現代詩にめっきり少なくなったたかう労働者の詩として貴重です。〈五月の空にはためく旗〉はメーデーでしょう。今年も、世界中でメーデーの行進が盛んでしたが、日本の働く人々も黙っているわけにはいかないんだという思いが表現されています。川周辺の情景に戦後社会が錆つかせてしまったものを描く高橋英男さん、バブル期とその後の不況時代の双方を経て来た実感こもる山岸哲夫さん。また、いまの世相やシステムの矛盾を俯瞰的な批評精神で鋭く描いたものでは原圭治さん、宮崎清さん、岡たすくさん、椎葉キミ子さん、片桐歩さんの作品があります。

人間であることの実感も希薄になってしまいがちな現代ですが、踏みとどまって、いま一度、人と人の関係性と生きる勇氣を詩情豊かに問いかけてるのが船曳秀隆さんの「人間になれば」です。愛を見失った現代のただ中で、汚濁のただ中で、関係性の回復と約束を探る渡辺めぐみさんの「誓願」も痛切です。

木田肇さんの「怖い夢」は刑事として殺人事件の現場に関わってきた作者自身の経験から書かれた作品です。警察の不祥事や疑惑が絶えないこの国ですが、捜査末端にはこんな誠実な刑事さんもいるんですね。

二章の最後は西岡光秋さんの名詩「手錠」です。罪を犯してしまった人にもさまざまな人生があります。周りには悲しんでいる関係者がいます。世の中、無反省な狂気の犯罪ばかりではありません。戦後日本社会の陰の部分が多分に影響した犯

罪も多く生み出されてきました。罪の意識に後悔する人のところ、それは私たちの誰一人として他人事にはできない本質的な人間学でしょう。この詩は「手錠」を「あなた」と呼びます。〈あなたが鳴るとき／ころがきしる／鳴らすあいつと／鳴らされるあいつの／ふたいろのころがきしる／あなたはかなしみの色をもつ絵具だ／あなたが鳴ると／そこから妻が子が／年老いた母が／なみだの画布に溺れる〉〈あなたは恥ずかしそうに／あいつの脈搏とともに耳をすませる／秋の木漏れ陽の舗道を行くとき／あいつの悔いを解いてやりたいと／キラリと慈愛の眼をきらめかせる〉。何と、現代社会の私たちの胸の奥を揺さぶる作品でしょう。厳しくも優しい詩のところです。

動物、草花と共に 第三章

二十一世紀に生きる視点の中でも世界中で力説されているのが地球環境・生態系の中での共存・共生でしょう。ヨーロッパではかつては工業公害加害者であった大企業さえもがエコ・ビジネスや環境・社会貢献をそれなりに実行しています。日本の国民の自然環境保護・再生の意欲もかつてなく高まっていると言えるのではないのでしょうか。

この章では、皆さんを自然界にご案内します。動物が好きな読者の方も多いことでしょう。多くのこどもたちが動物や花が大好きだということは、人間の原点的な何かをも示しているかもしれません。

詩の世界では、どちらかというと、人間の負の側面を風刺するのに動物の比喩が用いられてきましたが、時代は先へすすみます。この章の詩群には他動物蔑視のステレオタイプではなく、二十一世紀にふさわしい地球生命の観点が読みとれます。

まずは一九七二年生まれの関根裕治さんの「春れんさ」です。童話的なタッチで私たちの狭くなりがちの視野をひろげてくれます。一転、干潟のムツゴロウを描く南邦和さんの「ムツゴロウ悲歌」は社会的な視点で金子みすずの詩も織り交ぜて切実なものを訴えています。

中山公平さん、名古屋ええさん、菊田守さん、藤谷恵一郎さん、豊岡史朗さん、田中秀人さん、秋村宏さん、佐藤文夫さん、出山葉枝さん、萩尾滋さん、田中作子さん、日高のぼるさん、長瀬一夫さん、岡山晴彦さん、山本みち子さん、宇宿一成さん、といった書き手の皆さんが、さまざまな角度から私たちに動植物界との関係性を感じさせてくれます。

殺伐とした世の中であって、大きな視野で人間を見つめ直すことで、前へと手をつなぐ方向も見えてくるようです。

自死ということ 第四章

ここは辛い内容の章です。しかし、もしかしたら、この本を手にとってくださった方々の多くが特別の関心で読んでくれるところかもしれません。年間三万人以上の自死が社会問題になっているこの国です。それが切実に反映した作品群です。

自ら自死を考えたことがあり、そこから立ち直っていった経験を書く一九八一年生まれの亜久津歩さんの「命綱1」から始まります。

山下静男さん、吉田博子さん、小林由実さん、上田由美子さん、うめだけんさくさん、美澄さん、植田文隆さん、川奈静さん、といった書き手の作品が、さまざまなシチュエーションを私たちに伝えてくれます。

章の最後の中園直樹さんの「ピンクシャツデー」は、自死にもつながる「いじめ」の問題を書き、カナダから始まって現在、日本など世界中でとり組まれている連帯行動を伝えています。その運動については詩の中味を読んでいただきたいのですが、最初に行動を起こしたカナダの生徒たちの勇氣には励まされます。

病氣も老いも生きぬいて 第五章

日本は医学の比較的発達した国とされています。しかし、お金がないと満足な治療も受けられないという医療福祉制度の下での不安も顕著です。また、高齢化社会での介護の問題の未解決はさまざまな悲劇を日々生み出しています。

古代から人類はさまざまな病氣を克服してきました。昔の詩人も命を落とした結核はいまでは治る病氣ですし、多発しているがんも早期発見治療で命を落とさずに済むケースも増えています。それでも、時代の進行と共に新たな病氣が発生し、

時にはウイルスがあつたという間に多くの命を死に追いやってしまいます。

闘病というテーマと、老いを生きるというテーマは、いまますます重要になっていると言えるでしょう。

抗がん剤を服用して闘病しながらも巷のことも私たちの今後を戦争と平和などの問題の目的意識をもって思いやる青木はるみさんの「レッドゾーン」から、三度目の開腹手術を受ける前に友たちに生きるメッセージを伝える故・中野鈴子さんの「友よ 友だちよ」まで、二十一篇の詩がそれぞれに深めています。

宇宿一成さんの「脱皮した少女の」は、医療現場にいた少女の重病との闘いと現在の医薬品の限界、副作用、彼女の死の際に父親がとった泣かせる行動など、一人の若い生命のせめてもの刻印が文学的な形でさまざまなものを見つめさせてくれます。

加藤礁さん、片岡文雄さん、故・小山和郎さん、日高滋さん、園田實則さん、三島久美子さん、北村愛子さん、金田久璋さん、弓田弓子さん、川原よしひささん、入谷寿一さん、福士一男さん、武藤ゆかりさん、司由衣さん、秋田高敏さん、徳沢愛子さん、外村文象さん、佐藤勝太さん、といった書き手が、生きることの実感をプラスマイナス悲喜こもごもに伝えています。その中には社会批評性をもった作品も少なくありません。

農村、山里にて 第六章

この章は六篇ですが、戦後日本の経済システムの歪みが生んだとも言える農村の危機、山里の衰退・消滅の問題を扱った重要な詩が並んでいます。

滋賀の土地から私たちに送られてきた北原千代さんの「招待状」から始めましょう。長年育まれてきた土地の生活。土があり、畑があり、田んぼがあり、川や沼や湖があるでしょう。作物があつて、おいしい食文化があつて、季節それぞれの小動物がいて、お祭りもあるでしょう。そんな懐かしい風景は、二十一世紀にはなくなってしまうのでしょうか。いえ、そんなはずはありません、とばかりに命に響く言葉で優しくいざなってくれるようです。

和田文雄さん、後藤順さん、橋田活子さん、和田攻さん、越路美代子さん、大塚史朗さん、磐城葦彦さん、といった書き手がそれぞれに語ってくれます。

章の最後は皆木信昭さんの「むらが危ない」です。まさにタイトル通りの危ない状況。私たち人間が食べていくということ、地球の上で生きていくということ、帰ることのできるふるさとをもつということ、などなど、この詩に書かれたこの国の危機状況は、何が本当に大切なのかを考えさせてくれるようです。

レクイエム 第七章

命に敏感であることは、亡くなった命を悼む気持ちにもつながります。ここには、死者を悼む鎮魂詩、レクイエムの詩を収録しました。古今東西、このテーマの詩が無数に書かれてきました。それだけ人間は死者を通して命が限りあるものであることを実感し、失ったものをここに刻むことでいまに甦らせようと考えてきたと言えましょう。

坂本法子さんの「夜中 電話がかかりました」、岡三沙子さんの「対岸の父と」の二篇は身近な死者と現実生活の中で対話する不思議な味わいの詩です。それは幽霊ファンタジーのような次元ではなくて、いま生きている人の内面にいかに死者の存在が身近にいまも居るかという存在論的な深い次元のものです。生きている人の不安な日常生活で死者との記憶こそが潤いと励ましを送ってくれるという人生のつながりの感覚です。それを何気ないようで深い手法を駆使して描いています。

中山直子さん、安達甫朗さん、三浦幹夫さん、川島完さん、福本明美さん、山佐木進さん、おぎぜんたさん、片山ふく子さん、なたとしこさん、浅山泰美さん、といった書き手のそれぞれの命の詩に、しみじみと生と死を思うのは私だけではないでしょう。

章の最後の星乃真呂夢さんの「雪の扉」は「母へ まだ見ぬいのちへ」という副題にも表現されているように、愛する母の死が立体的な人生の歩みとして捉えられて、母につながる自らの命の実感からでしょう、いままた新たにどこかどこもが生まれることで母が誕生していく、という壮大な生命のつながりを詩情豊かにうたっています。これは一章のこどものところにもつながっていきますし、五章の老いのところにもつながっていきますね。

毎年八月になるといまでも戦争のドキュメンタリーなどが放映され、平和集会なども開かれます。しかし、本当は私たちはどの季節にも、常にこの問題に向き合うべきでしょう。戦争と平和の問題は過去の問題にとどまらず、いまの世の中のあらゆる問題を考える時にも、生命の本質的なこととして、あるいは人類共存・共生のための原点的なものとして、絶えずここにたちかえつていく必要があるテーマだからです。「殺人はいけない」「民族差別はいけない」と個人レベルでは言う人も、自分の身にまだ直接の危険が及んでいない想像次元の「戦争」となると、一人死ぬことのリアルな実感を失い、時にゲームのような感覚で武力や殺傷や国家対立を語ってしまうからです。「命」というテーマのこのアンソロジーにも、私たちはこの「戦争と平和」をなくてはならない章として入れます。

章冒頭には吉田義昭さんの「海の時間」を置きました。長崎県に暮らす叔父を久しぶりに訪ねた作者が当地の様子を淡々と描く中に、被爆ということをめぐる叔父と作者のこころの問答、その内面の掘り下げが展開されていきます。そこには一九四五年八月九日の長崎原爆が戦後の家族親族間の感情にまで複雑な影を落としてきたことが苦く浮き彫りになっています。そんな叔父との対話、自分自身との対話は、抑制された抒情の中に文学の陰影をにじませて、私たちに静かに熱く大切なものを問いかけてきます。

岡田優子さん、岡崎純さん、高田太郎さん、井上庚さん、大倉元さん、榊原敬子さん、井本正彦さん、浅田杏子さん、日下新介さん、石塚昌男さん、ぼうずみ愛さん、金野清人さん、故・鳴海英吉さん、たけうちようこさん、門田照子さん、西森茂さん、斎藤紘二さん、松本賀久子さん、島秀生さん、貝塚津音魚さん、猪野陸さん、梅津弘子さん、村田辰夫さん、山田ようさん、といった書き手が「戦争と平和」の本質的な諸相に踏み込んで作品化しています。そこには、第二次世界大戦中の戦死者の記憶や空襲、原爆などを始め、日本のアジア侵略やシベリア、戦後アメリカの世界戦略に組み込まれた日本の矛盾、在日米軍基地の危険な現状をリアルな現地報告のタッチで書いたもの、湾岸戦争の英国兵のこと、平和憲法、などが表現されています。

歴史と自由 〈第九章〉

命の大切さを保障するには経済的社会的権利の保障も大切ですが、言論の自由や政治的権利なども基本的人権として大切です。

近年再ブームになった「蟹工船」の小林多喜二などは、戦前、国民主権や戦争反対などを主張して国家に拷問され虐殺されました。戦後日本社会の原点は、そのような痛苦の歴史に学んで、思想信条の違いをこえて、圧政や他国侵略は許さないということではなかったでしょうか。しかし、市民の人権や自由は常にそれを大切にせる世論と私たち自身の努力によってこそ発展していくものです。

というわけで、ここに、「命」の自由を脅かすものとの長年のたたかいを記した章を設けました。

故・山田かんさんの「遠い丘」は十六世紀に長崎で弾圧・虐殺されたキリシタンの人たちを現代にあらためてここに刻み、被爆とも連想させています。

「馬の胴体の中で考えていたい」の故・小熊秀雄さんと、「胸に手を当てて」の故・今野大力さんは、戦前のプロレタリア文学につどった詩人です。自由闊達なアヴァンギャルドのしゃべりまくる詩を書いた小熊秀雄さんが軍国主義へと閉塞して行く日本の権力の圧力を受け、また極貧生活で病を患って、この詩の中に率直に表明されているような憂愁に陥っていったことには泣かせるものがあります。今野大力さんにいたっては直接の拷問がもとで体を壊して若くして亡くなりました。子どもがかわいがり、妻や妹や母など女性に優しくあった彼が無念の死の直前に書いた詩がこれです。ここにはひろく人の胸をうつものがあるのでないでしょうか。

故・栗原克丸さん、茂山忠茂さん、草倉哲夫さん、やまもとれいこさん、森田和美さん、西山正一郎さん、高畑烈さん、がさまざまな歴史を我がこととして深め、警鐘も鳴らしています。

考える、感じる 〈第十章〉

この章には、現代における「命」のありようをさまざまな角度から思考し感じとる作品を収録しました。複雑な現実を反映して、詩人の思考も多様です。

斎藤彰吾さん、池下和彦さん、薩川益明さん、柴田康弘さん、鳥巢郁美さん、柳生じゅん子さん、大西久代さん、和比古さん、おしだとしこさん、岡田恵美子さん、青柳晶子さん、横田英子さん、山本倫子さん、築山多門さん、坂本梧桐さん、山本泰生さん、はなすみまことさん、働淳さん、河井洋さん、岸本嘉名男さん、瀧川順一さん、江口節さん、中原かなさん、市川つたさん、という二十四通りの命の考察をぜひ読んでいただきたいと思います。

詩を読む楽しみには、書き手の詩想と対話することで読み手自身の考えも深まるといふことがあります。この詩群が、私たちがより深く考えるためのきっかけになればいいと願っています。

東日本大震災・津波など 〈第十一章〉

「三・一一」の事態に多くの作品が発表されています。いま私たちはテレビで被災地のさまざまな映像を見えていますし、実際に地震を体験もしました。しかし、発生からすでに四カ月経って、瞬時に流される映像ではなく、本当の被災状況やそこで人が「見た」ものの、考えたこと、の本質的な記録はあまり目にする事ができません。みんな必死に助け合い、何とかこれ以上の死者を出さないように、全国から励ましの声と行動の輪が広がっていますが、この事態を事実としてしっかりと刻印し、今後のためにさまざまなことを掘り下げて考察するという仕事は、文学が担うべきものでもありません。古今東西のそうした文学の伝統の力が、いま試されています。

三つに分けたこの章のⅠとⅡには、今回のリアルタイムの状況と展望がひとつひとつの作品に克明に記されています。

他地方や海外からの詩もあるところに、今回の事態が日本全体の重大事であることが表れています。わたなべえいこさん、清岳こうさん、照井良平さん、佐々木洋一さん、斎藤久夫さん、福田操恵さん、根津光代さん、岩田英作さん、福田明さん、村永美和子さん、志田昌教さん、ささきひろしさん、岩崎和子さん、下前幸一さん、香野広一さん、三浦千賀子さん、平原比呂子さん、木村淳子さん、佐藤恵子さん、東梅洋子さん、下村和子さん、藤貫陽一さん、朝倉宏哉さん、山本龍生さん、黒羽英二さん、秋山泰則さん、森田海徑子さん、尾堂香代子さん、酒木裕次郎さん、北村愛子さん、カトリン・ゼグリツさん、原田勇男さん、御庄博実さん、崔龍源さん、山口修治さん、長津功三良さん、田澤ちよこさん、中津攸子さん、深谷孝夫さん、水月りらさん、ヴァレリー・アフアナシエフさん、村田讓さん、片桐歩さん、星清彦さん、井上嘉明さん、日高のぼるさん、浅見洋子さん、松本一哉さん、といった書き手の作品をお届けします。

Ⅲには過去の大きな災害をテーマにした作品が収録されていて、これも貴重です。福井大地震の稲木信夫さん、関東大震災の故・栗原克丸さん、三沢の大火や十勝沖地震と今回の大震災の新井豊吉さん、一九七五年台風五号の大崎二郎さん、能登半島地震の井崎外枝子さん、阪神淡路大震災の畑中暁来雄さん、スマトラ沖ソロモン沖地震の安永圭子さん、新潟中越地震の山本十四尾さん、二〇一〇年台風九号の忍城春宣さん、です。

原発 〈第十二章〉

いよいよ原発です。三つに分けたこの章には、以前から警告されてきた原発自体の危険性、全国各地の原発の実態と反对市民運動、今回の福島原発「事故」の重大さ、をさまざまな手法で的確に表現した詩作品が並んでいます。この分野では、鈴木比佐雄さんや若松丈太郎さんなどの先駆的な詩が以前から書かれていました。

故・浜田知章さん、柴田三吉さん、大泉その枝さん、中村純さん、矢口以文さん、田中真由美さん、宮本小鳩さん、吉田和古さん、小野恵美子さん、堀内利美さん、白河左江子さん、吉村伊紅美さん、山本涼子さん、青木みつおさん、奥主榮さん、栗原滯子さん、熊井三郎さん、伊藤真理子さん、星野由美子さん、尾内達也さん、鈴木悦子さん、楊原泰子さん、田中詮三さん、木島章さん、山岡和範さん、山本衛さん、埋田昇二さん、岡村直子さん、館路子さん、田村のり子さん、

立石百代子さん、柳谷守人さん、玉造修さん、ごしまたまさん、伊藤真司さん、正田吉男さん、河野洋子さん、鷹取美保子さん、若松丈太郎さん、鈴木比佐雄さん、牧葉りひろさん、うおずみ千尋さん、結城文さん、黒木なみ江さん、黛元男さん、大久保せつ子さん、いわたとしこさん、郡山直さん、酒井力さん、吉田博子さん、大井康暢さん、真田かずこさん、望月昭一さん、小村忍さん、田島廣子さん、原島里枝さん、山越敏生さん、大原勝人さん、みもとけいこさん、森三紗さん、鈴木文子さん、山本清水さん、ダニエル・ツァーノさん、谷崎眞澄さん、塚本月江さん、浅尾忠男さん、くにさだきみさん、三井庄二さん、といった書き手の作品です。

全体として「命」の立場から、無責任な原発のあり方を根本から問い直し、警告し、違った明日を呼び掛ける内容となっています。

詩人という存在は、本来、ものごとの本質的なところをとらわれない独自の眼で見抜く存在です。その時代時代の表面的な損得とは違う次元で見つめる存在、それはある意味ではしんどい立場です。しかし、今回の原発問題にしても詩人はずっと前からその危険性を警告してきたということ、十年前二〇〇一年「九・一一」の際にも「報復戦争」の動きをいち早く批判し、その後のアメリカ軍の泥沼の戦争に日本の自衛隊が巻き込まれることも見抜いて批判していたのが現代の詩人たちであったこと、原爆でも震災でも日本のアジア侵略戦争でも在日コリアンのことでも憲法九条のことも、現代の日本の多くの詩人がひたむきな仕事として詩作品に結晶させてきたこと、などを総合して考えるに、私はこの世の中で詩というものにつどうことは、とても大切なものを見つめることだと強く共感するのです。

願いと祈り 〈第十三章〉

分厚いこの本も最後の章に入りました。願いと祈りです。それは、社会の現実を避けるものではなく、現実のかなしみや苦しみのただなからやさしくうたっていく、本当の希望の願いの声です。

故・壺井繁治さんの「球根I」の終二連を引用します。〈真冬の／暗い地下で、／春を夢みつづけている／無数の球根たち。／／夢みることはなにか。／夢みることこそが生きる力だ。〉夢みることこそが生きる力なんだ、というこのすてきな詩の言葉をかみしめます。こどもも青年も壮年の人も初老の人も高齢者も、私たち人間はそれぞれ何かしらの夢をみて生きているのではないのでしょうか。だからこそ、苦しみとかなしみの中でも、時に信じられない力を発揮して前へとすすむことができるのではないのでしょうか。そして、夢をみることもできるのも「命」あつてこそです。

お届けするさまざまな声は、一瀉千里さん、井野口慧子さん、青柳俊哉さん、荒木せい子さん、山内みゆきさん、須藤あきこさん、小林経城さん、香山雅代さん、故・宮静枝さん、故・高橋小夜子さん、高橋一仁さん、笠原健さん、スポンジこゆたんさん、高畑耕治さん、石村柳三さん、有馬敲さん、故・宗左近さん、の作品群です。

おわりに 〈結びの詩とともに〉

結びの詩に選んだのは故・木島始さんの「それじゃ —— 旅先で会った子どもたちへ」です。こどもで始まったこの詩集はまたこどもにかえります。でも、それはかつてこどもだったすべての大人のこころの中にもいる「こども」です。どんな時代もこどもたちが楽しく遊んだ後「またあした」と交わすさりげない約束にはどこかせつないものがあります。明日を信じるということ、また会えるということ、それ自体が困難になることもしばしばの現代社会と世界です。この地球上に生まれて二十一世紀に生きている私たちひとりひとりがこどもたちの約束のような新鮮な気持ちをもつことができたなら、どんなにすてきなことでしょう。日本も世界もいま大変な事態に満ちています。かなしみに満ちています。だからこそ、その中で共に生きている人々に、アンソロジーの最後の作品として、このさわやかで優しいこころの詩を贈ります。

〈キャンドル吹きけそうとするたびに
あざつての口笛がきこえるなら
また会おう〉

二〇一一年七月四日夜、これを書いている私は、沖縄北部の恩納村の海辺の部屋にいる。昼間三歳の息子がはだしになって喜んだ、サンゴの白い砂浜が、闇に包まれるのがよく見わたせる静かな部屋。三歳の息子は、隣の部屋で寝息をたて、連れ合いは畳に寝そべって、『*Imp the bulls shoot the kids* (芽むしり・仔撃ち)』大江健三郎著、を読んでいる。

——山奥の村で疫病が流行り、大人は逃げて子どもたちだけが取り残される。周囲を監視されて逃げることもできない。子どもたちは、そこで「自由の王国」を築こうとする——。

二〇一一年三月一日。東日本大震災。海辺の町をすべてさらった津波。福島第一原発の事故。四か月経過した現在も、原発事故は継続中。放射能は大気に海に放出され続けている。チェルノブイリの事故当時、強制避難区域となった地域と同じ放射線量の中、マスクをして学校に通い、普段通りの生活をしている福島の子どもたちがいる。避難しなくてはいけない国も東電も言わない。避難してもいい、大人たちも言わない。子どもたちは棄民されている。逃げることもできない。本当は一番最初に逃がしてあげなくてはならない。

「ただちに健康に影響がない」三月に繰り返し返し官房長官が伝えたことば。その通りである。チェルノブイリ事故では、子どもたちの甲状腺癌は三年目に起り、五年目にピークを迎えた。

三月に隠べいされたSPEEDI(文科省 緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム)の資料。五月になって漸く公開されたそれは、東北関東全域の大量被曝を予見するものだった。実際の放射線量と原発事故後の雨は、福島をはじめ、東日本全体を被曝させており、現在もそれは進行中なのである。首都圏でも、地域によっては福島の放射線量に匹敵するホットスポットが散見される。東京でも各自治体が、子どもの目線で放射線量の計測をはじめ、給食産地の公開や食材の計測の準備中である。私はこの四月「内部被曝から子どもを守る会」を立ち上げ、自治体にそれらのことを求める陳情や請願をし、親たちの情報交換をするサイトを運営してきた。政府や企業はこういうとき本当のことを言わない。私たちは、DNAの中に歴史の中にそれを知っている。「国家と電力会社は決して真実を語らない」(シユラウドからの手紙)二〇〇三年刊の詩集

の中で、鈴木比佐雄さんは、すでに三・一一を予見している。

一昨日東京で会った伊勢の友人は、伊勢市に、福島の子どもたちをサマーキャンプに招待するプランを計画中。低線量被曝は、子どもたちに晩発性障害をもたらす。一時的に放射能汚染のない地域に滞在することは、子どもたちの体を健康に回復させる。チェルノブイリへの架け橋というNPOは、チェルノブイリ事故で被曝した子どもたちを日本に招待し、転地療養させるプロジェクトを運営してきた。そして、私も今、息子を首都圏から遠く離れた沖縄で休ませているのである。

その二〇一一年に、アンソロジー集『命が危ない 三一人詩集』の刊行がなされる。作品も本も出版されるべき時がある。今、苦しい時代の中で、詩人たちは産まなくてはならない。

——私たちは、愛する者たちを守るために、いつも目覚めていなければならない——アフリカ系アメリカ人の詩人、アリスウォーカーのことばである。詩人たちは、目覚めていなければならない。いつも真実を凝視するために。現実より真実である虚構をことばによって語る者として。真実は、どこから語られても、いつも同じ一本の道につながっていた。ここに記された三一人の詩を読むと、一本の道が明らかになる。真実以外のものはすべて壊れた、三・一一で。それでも眠れる人たちに、私たち詩人は語り掛けなくてはならない。すべての人が目覚めて、命を守る、愛するという始源の真実に還るために。

序詩に置かれた高良留美子さん「産む」(一九八三年)は、産むという命の始源が終ろうとしていた、現代文明のはじまりを描く。そこが人間が真実から遠ざかった分岐点。このアンソロジーは、道を違えた私たちの分岐点からスタートするのである。女が産むのは「原子力発電所の建った村に／わずかにのこされた産小屋」。「産道に似た道が／村を横切る／女たちはそうやって産み／産みつけてきたのに／道はいつもあらぬ方角につづいていた」。産道に似た道は、私たちを生かすかのように見せて、産みだすかのように見せて、「その産道は／ついに原子力発電所までつづいていたのか／道の行方を見きわめてこなかったために／道は産む者と産まれる者を分かち／人は日暮れた道を一人たどらねばならない」。チェルノブイリ原発事故よりも前に書かれたこの詩は、フクシマをも予言する。命の始源を比喩する「産む」行為から遠く、命は原子力発電所に続いていく。すべての命を破壊するエネルギーを持ち、ひとたび事故があれば人間の制御を超えた放射能を出し続ける。命のDNAを損傷し、やがて破壊する。日々人が体内に取り込む野菜や牛乳や魚、大気によって、死の灰はやわらかな人間の内部で蒼白く発光する。それはもしかしたら、人類の緩慢な自死に似ている。真実を凝視する詩は、予言者となる。

高良留美子さんは知っていたのだ。二〇一一年のこの春と夏のことを。

第一章は、真実からまだ遠く離れていない子どもたちへ。

「私たちは／生まれたばかりの赤ちゃんに／幸せの種を蒔いてもらう／美しい場所を／用意できているだろうか」（「種蒔き」空色まゆ）。美しい場所。今、痛みをもつて、このことを抱きしめたい。原発をとめられなかった悔恨とともに。

「肩を落としていた子が（苦しまずに死ぬ方法があるとい……）（中略）こんな瞬間だ 横断歩道を渡る数歩で／風雨が生を簡潔な骨格にするかのように／世界が本質をさらしてしまう」（「ループ」山本聖子）。中学受験に失敗したと思われる小学六年生の呟き。詩人は、一二歳の子どもことばに、世界の本質を見てしまう。

「どこかで つくられた道を／知らぬ間に 歩かされるのではなく／自分の足で 大地に立ち／考えてみよう 自分のことばで」（「自分のことばで」小森香子）。自分のことばを獲得した者は、生きることの真実と尊厳に近づくことができる。子どもたちに、生きるあかしを力強い励ましを持って語りかける。

そして、斗沢テルオさん、島田陽子さん、谷崎真澄さんは、虐待され殺される子どもを描く。昨年（二〇一〇年）は、子どもの虐待死の報道が相次いだ。その背景には、孤立した育児、長引く不況下での貧困がある。渋谷のネットカフェのトイレに、胎児を産み落とした女性、大阪のワンルームマンションに子どもたちを置き去りにして餓死させた女性、ともに二四歳だった。

「放射能の雨の中 黄色い傘をさして／こんなに腐敗した 土壤に／子供たちが咲いている」（「咲いている」井上優）、「わたしの前にくばられた食べ物／あの子に運んであげてください」（「給食の時間に」新川和江）、「——おおきくなったら／ときかれて——生きていたい／と答える子ども」（「ゴムまり」瀬野とし）。詩人たちは、危機に瀕してなお無防備で、真実に近いがゆえに「世界の本質をさらす（山本聖子）」子どもたちに、胸を詰まらせ、はつとするのだ。

「大人が作った汚濁の社会へ／身を乗り出していく子どもたち／犯罪や虐待や死さえも待ち受けている／疲弊した地球上にさらされている子らよ」（「生命」清水マサ）。子どもたちの生命が置かれている状況。子どもたちの背中を、詩人は祈りを込めて見送る。

第二章は、仕事、世の中を通し、過労や危険と引き換えに発展していく現代文明を描く。

おそらく海を埋め立てて造られた土地に聳える、三十階を超える高層マンションの幸せの象徴のような窓の明かりを見て、詩人はつぶやく。「この土地のどこかに／出稼ぎに来て／砂嵐の中へ行方不明になったままの／作業仲間の骨が埋まっているってはなしは／それはもう怪談のような」（「骨のはなし」浅井憲）。東京の湾岸も二十一世紀になってから十年、タワーマンション、オール電化、さらびやかな夜景を宣伝文句に発展した。しかし、三・一一は、埋め立て地やオール電化の脆弱さをも露呈させた。埋め立て地には暴力的に数メートルもマンホールが突きあがり、汚泥にまみれ、人は停電の三十階のタワーの重い扉の中に閉じ込められた。友人が呟く。「結局、自然でないものは、もとの形に戻った」と。

「私は、このために、日夜、数知れぬものを押し潰してきたことは事実である。多くのものを殺めることなしに、耐えるという行為はないはずである」（「L釘」小松弘愛）。「私は職場で名前を奪われている」で始まるこの詩は、現代の職場によつて名前を剝奪され、耐える「人間」の、だれにも気づかれない血をあざやかに描き出す。

「グラフィックデザイナーの娘の職場では 今や／睡眠時間に食い込む 未払い残業があたり前なのだ」（「チャップリンがない」宮崎清）は、娘の置かれた現実と、テレビをつけると傍若無人に空気を引つ掻き回す《お笑い》に、戦争への接近の既視感を見る。現代日本の批評性の欠如を「一人のチャップリンがない」と記す。

さらびやかな発展を外面にかかげた現代文明に、名前を奪われ、批評精神を忘れ、真実が見えなくなった我々に、片桐歩さんが語りかける。「寝ている者を呼び起こす声は 誰なのか／さあ立ちあがり あなたのなすべきことをしなさい／大地はあなたの方に用意されたものなのだから」（「労働」）。本来、労働とは、大地から、生活に必要なものを自ら刈り取る。天から許された贈り物として。

第三章は、動物、草花を見つめ、小さきもの、無垢ないのちの姿に、静かに洗われ、謙虚に生きることを見つめなおす静かな詩人たちの心に満ちている。

佐相憲一さんは、悠々と国境を超えるゴマファアラシとの対話を通じて「この島国も／ふるさとアフリカから 大地から／海から そして 人間から／あまりに遠く離れてしまった」（「ゴマファアラシさん こんにちは」）。いのちの起源から遠ざかった人間を悲しみ、ゴマファアラシの姿の向こうに、「生きる」ことを獲得しようとする。

日高のぼるさん（「ブンは風のなかへ」）の舞台は、発展から取り残されたような、懐かしい下町の小さな工場ばかりの街。ふたがけされた川の上を通り、アパートの鉄の階段をトントンと昇り、ブンチョウと妻との静かな暮らしを描き出す。

小さな命をつなぐために、ア王玉をスポイトでブンチョウののどに与えるというささやかな営み。きらびやかさと対局にあるつましやかな日々が、いとおしむように描かれている。

第四章 自死ということは、命を粗末にすることとは違って、懸命に生きようとしたがゆえに実存と真実と対峙した人間、ささやかな日常という得難い幸福を得られなかった人間の絶望を描く。生は、いつもすぐに風に翻り、翻ったカードの裏は死である。命は、そのあわいに、きわどい境にいつも立っている。「また来週、ここで会おう。」(「命綱」) 亜久津歩、「これ婦人会のお土産」(「丹波の黒豆」) 山下静男、何か一つのことばがあれば、差し出されただれかの腕があれば、人の命は明日につなぎとめることができる。

第五章、第六章、第七章は、身内や自身の病や死に向かい、いのちを透徹したまなざしで凝視する詩人のまなざしに溢れた作品群。特筆すべきは、一五年以上もステロイド全身投与を受け「副作用の見本」のようになった女性の死とその家族の愛情を描いた「脱皮した少女の」の宇宿一成さん。三七歳になった「少女」の亡骸を車の後部座席に座らせた父親は、娘が見ることのなかった夜の町の賑わいを見せたいと、医師たちに頭を下げる。

第八章、第九章、一〇章は、第二次世界大戦後から二〇一一年の三・一一までを含む時代区分で捉えたい。この時間の中で、詩人たちは戦争や原爆や劣化ウラン弾の意味を、真実を見つめようとしてきたのではなかったか。真実はいつも詩のことばのように静かである。まやかしのことばには、札幌が積まれ、安全は神話に過ぎない。時代を暴力と死に煽動するのはいつも大きな声ではなかったか。

「家族の中で、ただ一人だけ被爆した自分が、いつの時代も被爆した人間として正しく生きてきたかどうか」と(「海の時間」吉田義昭)。叔父の原爆の話を選り抜いてしまう「私」は、叔父に心の弱さを指摘される。被爆した人間として正しく生きる。「叔父」は、ヒロシマ、ナガサキ、日本という国なのではないか。そして「私」は、そこに暮らしてきたすべての大人。「私」は、「叔父」の話の間はず、フクシマを数えてしまったのか。「私」たちの心が弱く、真実を見つめることができなかつたために。

湾岸戦争のアメリカ帰還兵は、劣化ウラン弾で被爆し「この命を守れ！」と叫ぶ(「核の報復」貝塚津音魚)。正義のための戦争。アメリカでは為政者たちが、声高に叫ぶ。真実はいつも声高ではない。それは注意深く隠されている。私たちは、真実を凝視^{みつ}め、詩や批評を聴き、道を誤らないようにしてきたはずではなかったか。

「歴史学習をとおして／人々が国の主人となるために／どんなに犠牲を払ったのか／教え終えた 春の朝／なのに／わたしはピアノを弾く」(「君が代」草倉哲夫)。日本の学校では戦争は「歴史学習」で扱われる。しかし戦争は今この現在でも姿を変えて、布石のように私たちの日常をかすめ、やがて覆おうとする。放射能のように。詩のことばは、それを払い除けることばになるのか。

第十一章、第十二章は、東日本大震災、津波、原発。詩人たちは、未曾有の自然災害と原子力発電所につながっていた現代文明と意図的な安全神話による人災に呑み込まれた列島の東を、意志ある生き残りとしてうつつし出す。私は、三・一一後、しばらく詩が書けなかった。私たちの経験は、私のことばを津波のように大きく超えた。私のことばは津波に呑まれ、未だ見つからない死者たちとともに海の底に沈んだ。原発が撒いた透明な放射性物質が降る東日本で、ほかの母親と同様、幼子を抱え、西に南に逃げた。現代文明がもたらした新幹線や飛行機に乗って。

「今、確証をもって云えることがある／もうこれ以上／誰かが犠牲になって創られた光などいらない(中略) 真実の警鐘は権力の鐘に掻き消され／ゆっくり死んでいく命に／僕らはうまく気づけないでいたけれど／世界は変わったんだ。／あの日を境に」(「幻の力」大泉その枝)、「コンクリートで固めて／地球の奥底に封印しようとも／つきまとう風／とけこむ水から／きみを守ることができない」(「いまからでも」新井豊吉)、「わたしは知ったのだった／雨に打たれて帰り／蛇口をひねって水を飲んだ時／それを知ったのだった／逃げる場所はない／どこにもないのだと」(「掌の林檎」柴田三吉)、「原子力発電爆発事故 放射能／音も臭いも影もない／降っている／レベル七／降っている」(「ふるさと福島」うおずみ千尋)、「五月のみどりの夜のなかで／福島を フクシマ と書く」(「3・11のバード」浅尾忠男)。見えないけれど、確実に存在する死の灰。しんしんと雪のように降り、水を汚染し、私たちは、「ひとつずつ配られた重い果実」(前出 柴田三吉)を、受け止めなくてはならない。「原ノ町駅へ行ってみる。／施錠されてだれもない。(中略) 赤錆びたレールのむこうにならがあるのだろう。／その先がみえない。／プリアピチで見た赤錆びたレール。／ビルケナウで見た赤錆びたレール」(一九七〇年代から、多くの放射能漏れを起してきた福島原発の異変に警鐘を鳴らし続け、三・一一の事故で避難区域に指定された南相馬の詩人、若松丈太郎(既視体験)。原子力発電所が爆発したレールの向こう、人類にはどんな道が遺されているのか。それでも、私は子どもたちをあきらめない。大地をあきらめない。未来をあきらめない。ここから私たちは始め

るしかない。深い悔恨と子どもたち、命への詫びの中から。目覚めよ、愛する者を守るために。詩のことは真実をうつしているのに、どうしてもつと届かないのか。それは私たちの知性の欠如なのか、勇気の欠如なのか。戦争を止めることができなかつた詩は、原発を止めることもできないのか。それでも詩をあきらめてはいけない。波に吞まれ、足元が揺らいでも、蚕のように真実を吐き出せ。慟哭に恐怖に立ちすくむ日も、冷静に醒めて真実を凝視めよ。

「オリオンは弾くな（中略）二十世紀から二十一世紀へと続く物質文明の神話を／くつがえす精神が 外部へと／にじみ出すまで 廃墟と化したのは／わたしの心も同じ（中略）前へ進むためにも／この絶望を掘り下げよ（中略）そうして生命が初めて生まれた海の底に届いたら／くみ上げよ わたしは私自身に見合う恥なきことばを／あなたは希望を」（二〇一一年三・二）狂詩曲」崔龍源、「今こそ、権威や既成の概念に惑わされることなく／普遍の価値を自らが見出して行動する／「私」から声を発する「私」が求められている」（「四番目の大罪」楊原泰子）、「ぼくらは裸に戻るべきではないか／掌に何ひとつ握ってなかった頃の」（「ヒトは？——ゲンパツはゲンバク——」山本衛）、「いのちを守る一つに徹することを／私たちは為さなくてはならない」（「いなむらの火」塚本月江）。ここに同じ魂の人たち、たつた一つの真実を共有する人たちがいる。命の始源を抱き、深い水底の絶望の中から、死者たちを抱いて海面に浮かびあがり、目覚めて生きるときだけ、私たちに「生きる」資格が与えられる。

「やつと泣きやんでほつとするきみに／鳥が目くばせしかえすなら／また会おう」。アンソロジーは、木島始さんの（二）それじゃ 旅先で会った子どもたちへ」で結ばれる。

もう一度君に会いたい。すべての君に。生まれるのを逡巡する子どもたちに。生きたかった水底の子どもたちに。今も女の胎内で育ちつつある君たち、勇気を持って産まれてくる君たちに。私たち、もう一度出会おう。許してくれとは、決して言わない。君たちと一緒に生まれおとして、生きなおして、産道からつながる真実の道を、今度こそ間違えずに歩きたい。君たちのまなざしに目を逸らさない私たちになりたい。

解説3 生きる希望

宇宿 一成

子供のころ、部屋に飛び込んでくるカミキリムシを並べて、首を挿げ替えて遊んでいたころがあった。虫は、頭部がなくてもしばらくは動いている。移植成功！と小学生の私は呟いたものだ。そのころ、札幌医大で早すぎる心臓移植が行われ社会問題にもなっていたのだ。それでもやがて虫は動かなくなり、二匹とも死んでしまう。入れ替えた頭部を戻しても、虫の命は戻ってこない。繰り返し繰り返し、勉強しているふりの夜の子供部屋で、そうやってばかりは虫を殺した。

夏の田んぼでは、紫蘇の葉をちぎって糸に結わえ、蛙を釣った。釣った蛙をどうしたか、はつきりとは覚えていないがほとんどもは遊んで殺したのだ。

そのように、小さな命を僕たちは遊んで終わらせた。終わらせた命は、小さな干からびた虫や蛙の体に再び戻ることはなかった。

命が尊いのは、失命した時点で手の施しようがなくなるからだ。作りなおしたり、再び吹き込んだりすることのできない命を、徒に損ねてはいけなと思うようになった。

さらにもっと幼いころ、曾祖母が死んだ時に、人が死なない薬を作れたらいいのに、と単純に思ったことが私が医師を志した原始的な意識だった。

今回、「命が危ない」というタイトルのアンソロジーを編むという、佐相憲一さんのお誘いに賛同したのは、近頃命の大切さを覆そうとするようなマスコミをにぎわす陰惨な事件が目についていたからだ。育児放棄や虐待による子供の死が、報じられない月はないほどで、家庭という、命を育むもつとも卑近な揺りかごであるべき場所で悲しいことが起こっている。起り続けていることに危機感を抱いていたからだ。親が子を殺してしまうということは、ギリシャ神話の始まりから伝えられることではあつて、たとえばゼウス神は母親にかくまわれてかろうじて父神からの殺害を免れたというのだから、人類の歴史に根源的に刻まれた悪習なのかもしれないとも思っている。社会状況が不安定で人々に脅威を与える時、人は子を殺そうとしてしまうのかもしれない。「命が危ない！」などというメッセージは、する必要がなければ発しないに越したこと

のないメッセージだと思う。けれど、そう言わずには居れない社会状況が、確かにあるのではないかと思う。

よびかけに応じた沢山の詩が、今、手許にある。命を守ろうと、敢えて上げられた声が、これほどの厚い紙の束になっている。そのことに一種の感慨を覚える。これらの作品を、発行前に読むことができることに、得をしているような喜びを感じている。

序章の高良留美子さんの「産む」に描かれた命を産む行為を包む暗がり。生を産むことの背後には、死が、光と影のように寄り添っている。そうして生まれた命が育ち、第一章「こども」。空色まゆさんの「種時き」^{たねま}では、赤ちゃんは閉じた手に空から持ってきた幸せの種をもっていると、そのように感じられることが既にとても幸せだと思う。中村純さんの「愛し続ける者たちへ」は、大阪での幼児虐待事件を対象に、ママを愛し続け、待ち続けて死んでいった幼い姉弟に「許してくれ」とは決して言わない」と繰り返し書く。そこには同時代に子供を死なせた親をもつことへの、そうした親を作り出した現代への激しい怒りと祈りがある。斗沢テルおさん、島田陽子さん、谷崎眞澄さんの詩も、不条理にも失われてしまった幼い命への祈りがこめられていて、念仏のように、経文のように、心に響いてくる。不登校やいじめを題材にした武西良和さんの「悩む子とも」、子供の自殺を描いた山本聖子さんの「ループ」……それぞれに味わい深く、読後の思いも複雑で深い。子供をめぐる社会の現状も決して明るくないのだと思わされる。佐相憲一さん「あした生きていたら」のように、今日を生き抜くことまで危うい社会的現実にも曝されている子供達も、世界には在るのだ。

第二章「仕事、世の中」には職業や世間からの疎外感を、植田文隆さん、大森ちさとさん、中村花木さんらが描いている。ことに小松弘愛さんの「L釘」の、「私は、落丁している。」という眩きの伝える喪失感の深さに、ほくは言葉を失ってしまふ。渡辺めぐみさん「誓願」での「愛が寒いならその代償にわたしを燃やして下さい」という一行の伝える自己犠牲の痛みも果てしなく深く思われる。

第三章「動物、草花と共に」で描かれるヒト以外の生命も尊いものだと思う。関根裕治さんの春の草花と鳥、虫達、佐相憲一さんのゴマファザラシ、南邦和さんのムツゴロウ、中山公平さんのウグイやアマガエル……。そうした命に託して語られる言葉にも心ひかれるものがある。また、田中秀人さんの「あかね雲」は老犬の命そのものを慈しむ眼差しが温かいと思う。秋村宏さん、佐藤文夫さんの描く命は、人の生活との関わり合いの中で切なく輝くようだ。山本みち子さんが「大いなるものの配剤」と書くように、それら多くの命を包む大いなるものが、作品の背後から浮かびあがって来る。

第四章は「自死ということ」。重久津歩さん「命綱1」は、第一回「とをるもう賞」を受賞した詩集のタイトルポエムでもあり、自ら死を択ぶまでに追い詰められる若者の心を切実に表している。山下静男さん、吉田博子さん、小林由美さん、上田由美子さん、それぞれ身近な人を自殺で失ったやるせない思いが切ない。

第五章は「病氣も老いも生き抜いて」。だれしもが、生きているある時点で直面する病氣や老いだ。「生き抜いて」という表現には希望が含まれる。現実にはやがていつか、病氣や老いによって生きていけなくなるのだから。死に至るまでの日々を、病氣や老いと闘いながら、あるいは共生しながら、少しでも良い状態で生き抜くという思いが、それぞれの作品から溢れている。青木はるみさん、片岡文雄さんの、それぞれに見つめる病や老いを、共有したいと思う。

第六章「農村、山里」は生活の中で命が輝いている。「この手紙を読んだら 来て下さい/夕餉のころかならず 来て下さい」という北原千代さん「招待状」にあふれる心情に代表される温かな思いやりを育んだ山里や村が、存続の危機に在るのも現実だ。皆木信昭さんが「むらが危ない」に書いたように、こうした村の危機が国の危機に繋がるのではないかとの危惧を覚える。

第七章は「レクイエム」。坂本法子さん「夜中 電話がかかりました」や中山直子さん「雪を食む鳩 母の姿」、おぎぜんたさん「母は何を」など父母や近い人の死を悼む作品が並ぶ。小山和郎、柳原省三といった詩人を追悼する川島完さん、福本明美さんらの作品も心に残る。浅山泰美さんの「玉手箱」に「あと 何年/わたしはそれを開けるだろう」と書かれるように、死んでなお、残された者の心に生き続ける人の面影が濃い作品群だ。

第八章は「戦争と平和」。この国に戦火が上がったのはもう随分と前のことだが、その炎は今なお心を焼き続けている。原爆に被爆した叔父さんとの関わり方の微妙な変化を、叔父さんに語らせる吉田義昭さんの「海の時間」に描かれるように、避けようとしていたことが僕達にはあつて、けれどその事物自体の方からもう一度関わり合うことを迫られるような仕方で、この国の「戦後」はもう一度僕たちの現在と交差するように思われる。また斎藤絃二さんが「千羽鶴」で書いたように、「鶴を折るな」ということと「鶴を折れ」ということとの条件付きの命令形のように、条件付きで背反する事象の両端の間を揺れ続ける心の歴史があるように感じる。

第九章は「歴史と自由」。山田かんさん「遠い丘」はキリシタン弾圧を、茂山忠茂さん「亡霊」は薩摩藩による圧政以来虐げられ続けた奄美の人々を題材にする。人が人を不条理に苦しめた歴史をこの章の作品群は指し示し、糾弾する。

第十章「考える、感じる」の章は、これまでのいずれの章にも分類されにくい作品群だ。鳥巢郁美さん「影を踏む」、柳生じゅん子さん「朝の科学」、山本倫子さん「危ういひかりの中で」など、命の尊厳の在り処を抽象的に示している。河井

洋さん「名は茉莉花」は現代に至るさまざまな社会的事件を老人が饒舌に話していたのだが気付くと自分一人が駅のホームに立っているという詩なのだが、最後に(2011・3・10)との日付をつけることで翌日に起きた巨大地震と津波がそのことについて一言も触れずに感じさせるという離れ業をやってみせている。

そして十一章「東日本大震災・津波など」。ほんとうに酷い春を演出した、(消してしまいたい一日)について多くの詩が書かれた。その現状については、わたなべえいこさん「遺体安置所」、清岳こうさん『マグニチュード9.0』より、照井良平さん「ウミネコが鳴いている」、佐々木洋一さん「ガレキ」など、災害のこの現場にいたからこそその描写や表現で言葉が押し寄せる。この災害については、福島詩人合亮一さんが震災後にツイッターで綴ったすぐれた多くの詩を発表しているが、書くことで昇華される思いもあり、今伝えなければならぬという緊急性も感じさせるものだ。一人ひとりにとつての震災。そこから立ち上がるために書き綴られた多くの詩は、まさにそこで失われた命を、危機に瀕した多くの命を掬い取って私たちの前に差し出す貴重な資料でもあろう。「Ⅱ 東日本大震災をこえて」の項では原田勇男さん、御庄博実さん、崔龍源さん、山口修治さん、長津功三良さんが、震災後の未来へつなぐ生きる希望を示している「Ⅲ 過去の災害」には栗原克丸さんが関東大震災を、稲木信夫さんは福井大地震を、新井豊吉さんは十勝沖地震をめぐる悲惨な記憶をひもとく。ほかにもさまざまな災害の記憶が示され、こんなにも多くの災害を私たちは生き延びたのだとの感慨をもつ。個人的には、各所で起ったこれほど多くの災害を忘れて生きてきたのだなあ、不思議な思いがする。

十二章は「原発」。浜田知章「ノルマンディの林檎」は、核爆弾の開発と原子力エネルギー開発とが同根の事象であることを鋭く指摘する。浜田詩に呼応するような柴田三吉さんの「掌の林檎」をはじめ、大泉その枝さん、矢口以文さん、田中真由美さんらの作品が並ぶ。こんなにも地震の多い国である日本に、多くの原発が立ち並んでしまったことの悲劇を垣間見る思いだ。原発事故以前、電力会社はどれほど原発の安全性をアピールしてみせたか。国も一体になった原発推進が間違っていたことはあの日の一瞬が証明して見せたのだ。それでもまだ、安全基準の見直しで対応できるのだろうか。この夏を、原発を動かさずに過ごすことができればいっせいに廃炉への世論が高まるだろう。核はやはり、作品「埋み火」で星野由美子さんが書いたように「ひとには扱いかねる秘められた火」なのだと思う。

十三章は「願いと祈り」。壺井繁治の「夢みること、／それは生きる力だ。」という詩句にこめられた生への願いの強さ。一瀉千里さんの亡くなった人のぶんまで生きるのだという祈り。井野口慧子さん、青柳俊哉さんらの作品のすべてが、そうだ、と共感を呼ぶ。共感して私は、生きることへの希望に、いつのまにか満たされている。

この一冊に込められた命の声は悲痛で強い。多彩な作品を読んでいると、今の日本に潜在し、また顕在する多くの不条理が浮かび上がってくる。そうした声の中に、命を守る力が育まれてゆくと信じる。決して難解な作品は多くはないので、詩を書く人だけでなく多くの人に読んでいただきたいと思う。そして、読了した私のように、悲劇や不条理を超えてなお生きる希望に満たされたいと切に願う。

この『命が危ない 三・一一人詩集』は、三・一一後のおそらく最初のアンソロジーとなることでしょう。その第一章と第二章所収の作品を中心に読みながら、わたしのいまの思いを述べることにします。

二〇一一年三月一日の大震災の、とりわけ宮城、岩手、福島三県沿岸部を襲った津波による被害は甚大でした。二〇万以上の世帯の六〇万人以上の人びとが罹災し、一万五千五〇〇人を超える人びとが死亡し、七千二〇〇人ちかい人びとの安否がまだ不明のままです。香野広一「多数の命が津波にうばわれた」、わたなべえいこ「遺体安置所」などの作品が書かれた所以です。わたしたちが暮らす南相馬市では、三千七〇〇世帯の一万三千四〇〇人が罹災し、五八〇人を超える人びとが死亡し、安否不明の人びとがなお八〇人あまりもいます。

加えて、フクシマ原発の事故によって、周辺の一〇万人もの人びとが家を離れ、仕事を失って、いつ終わるとの見通しがない避難生活をつづけています。

市民としての最低限の生活がなりたっていないのです。畜産農家の苦境に同情して青木みつお「飯館」、黛元男「農夫の死」が書かれ、福島県にゆかりある詩人たちの心配はうおずみ千尋「ふるさと福島」、大久保せつ子「福島の子だから」などとして書かれました。

フクシマ原発の北一〇キロから四〇キロに位置する南相馬市は、警戒区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域、特定避難勧奨地点に指定され、三〇キロ圏外には特別の指示がありませんでした。ひとつの自治体住民が居住地によって五つの異なった対応を求められているのです。緊急時避難準備区域の重篤な病人や要介護者は市外の病院や施設へ移されましたが、転院先で死亡する人があいついでいると聞きました。幼児のいる親や妊婦は区域外へ自主避難し、離散生活を余儀なくされている家族がいます。避難しなかった生徒たちは三〇キロ圏外の学校に通学し授業を受けています。電気、水道、ガス、ガソリンも支障なく使え、新聞、郵便物、荷物も配達されているのに、作物をつくれぬ、家畜を飼えない、漁ができないだけに、流出した企業、閉鎖した工場、休業している病院や商店が数多くあります。JR常磐線は開通の見こみがなく、図書館も市民会館も閉じられたままです。奇妙な居心地のわるさを感じつつ、こんななかで暮らしています。

これが百余日まえまで七万一千の市民が生活していたわが町の現況です。

安全で安価でクリーンで環境にやさしいエネルギーだと宣伝しながら、これまでにしばしば起こしていた事故を隠し、その場しのぎの言い逃れをし、ごまかせるところまでごまかさうとし、露見すると小出しに発表し、言い訳を繰り返してきた東電の隠蔽と虚言と弁解に満ちた典型的なベテן師体質が、三・一一事故後も改まるどころか、いつそう磨きがかかっているようです。当事者たちは事故の重大さをまったく認識していません。責任感も誠実さのひとかけからも感じられない対応をつづけています。(想定外)というこぼが恥ずかしげもなく繰り返されてきました。(想定外)とは専門家たる者にとつては、みずからの想像力の欠如と無能ぶりを告白しているにほかならないのに、そのことにすら気づいていないようです。このことを捉えた作品に、星野由美子「埋み火」、山本清水「黒い牙」、山本衛「ヒトは？」などがあります。怒りをとおこして、あきれかえり、空しくなっています。その一方、原発作業員は苛酷な労働環境に置かれています。このことを指摘した作品として、みもとけいこ「カルボナード火山の青い光」、真田かずこ「メルトダウン」、山岡和範「原発」などが書かれました。

原子炉の安定化の見通しはまったくありません。事故の終熄どころか、破局的なチャイナシンドロームへと向かっているのではないかと危惧されます。だが、フクシマを離れてみると、――五月末に東京へ行ってきたのですが、――そこには原発事故はすでに過去のことでもあるかのような都民の暮らしがあつて、別の居心地のわるさを感じました。二つの居心地のわるい世界が平行して同時進行しているかのように思えてなりません。

いま、わたしたちのまえにあるのは、なにかの始まりなのでしょう。あるいはなにかの終わりなのでしょう。そのことを見届けることは文学の存在する意味のひとつでしょう。そのためには、見えないものを見、聞こえないものに耳をかたむけ、感じられないものを感じることが求められています。

中村純「ヒバクシャ」は「も」というひとつの助詞が喚起するわたしたちの現況を表現しています。柴田三吉「掌の林檎」はわたしたちの掌のなかにある「熱い火の種が詰まっている腐った林檎」を感じとっています。

フクシマの事故を承けて、ドイツ、スイス、イタリアなどで脱原発の動きがすすんでいます。ほかの国ぐにもひろがってゆくことでしょう。国内ではどうでしょうか。こうした動きに背を向けて、四つのおおきなプレートがぶつかりあっている日本列島に原発はふさわしくない発電方法であることがあらためて実証されたにもかかわらず、この先も原子力発電に依存していこうとする勢力が強いように思われます。埋田昇二が「浜岡が危ない」を書いているほか、国内の各原発の危険性を指摘する作品も数多く書かれています。浜岡原発の稼働停止措置は、他の原発で運転を継続しあるいは再開するための布石だったことは、玄海原発の運転再開についての国の姿勢を見るまでもなく明らかでした。

フクシマ原発事故に意味があるとすれば、それはわたしたちが変わってゆくためのまたとない機会を得たことです。仮に事故がなかったとしても、ながい将来にわたって放射能を発生しつづける膨大な量の廃棄物を後代に遺すことは、不遜と言ふべきあるまじき行為です。長崎大学環境科学科戸田清教授は、人類は核のゴミの後始末のためにこれからあと百万年間も「存続する義務」を課せられたと言います。現生人類は発生からまだ二〇万年しか経っていません。その五倍もの時間をわたしたちの末裔は「存続する義務」を背負いながら生きられるでしょうか。それどころか、わたしたちの文明として認知できるのはせいぜい五千年しかさかのぼりません。それだけに、これから来る人びとへの責任を考えた生きかたを、すべてのわたしたちは求められているはずで。

わたしたちは生きかたが下手になつたいきものようです。人どうしが殺しあい、戦争しあい、生きる環境をみずから破壊しています。そのうえの核の拡散です。地球そのものが核の船であるという栗原澄子「問い」、その船は難破船だと言う鈴木悦子「難破船」が説くように、持続する社会を実現するためには、脱戦争と脱核が要諦となることでしょう。

このような意味から、ひとりの農夫、舛倉隆はわたしたちの先達です。一九六八年に東北電力は、舛倉隆が住む福島県浪江町棚塩に原発の建設を決定します。その後から死亡する一九九七年まで三〇年ものあいだ、彼は一貫して建設計画に反対しつづけて、所有地を建設反対者の共有地として登記することによって守り抜きました。その棚塩もいま警戒区域圏にふまれています。だれも立ち入ることのできなくなった墓地から、舛倉隆はなにを見ているのでしょうか。彼が守りとおした棚塩に原発が建設されることは、おそらくないでしょう。上関原発を建てさせない祝島島民の息の長い闘いと共通するものがそこにはあることでしょう。彼の意志を継承することをわたしたちの希望にしたい、そうわたしは思います。

解説5 残された人びとを勇気づける本当の言葉をめざして

『命が危ない 三二一人詩集——いま共にふみだすために——』に寄せて

鈴木 比佐雄

二十二世紀の歴史学者達から二十世紀と二十一世紀は、空爆による都市への大量殺戮と百万年も残る高濃度放射性廃棄物を後世に残した狂気の時代といわれるだろう。一九〇三年にライト兄弟が飛行機を誕生させた。一九三八年に日本軍の無差別爆撃により、重慶のような都市の大量殺戮が可能となった。さらに一九三八年に発見された核分裂を利用したマンハッタン計画によって原子爆弾が開発され、一九四五年には米軍が降伏したナチス・ドイツの代わりに数十万都市の広島・長崎に原爆を投下した。また原爆製造から派生した原子力発電は、第二次大戦後に米国スリーマイル島やソ連時代のチェルノブイリなどの原発事故により民衆を放射能の外部被曝や内部被曝の危険に曝してしまった。そして二〇一一年三月一日に福島では、巨大地震・津波が加わり、冷却装置が喪失し、炉心隔壁内の燃料棒がメルトダウンし、水素爆発を引き起こし、大量の放射能汚染により多くの民衆の命を危うくさせ、地球環境を悪化させた。二〇一一年時点で世界中には四三〇基以上の原発が存在し、今も五〇基以上の原発が建設中で計画中のものは数多くあると言われている。

「ああ、ここは 光の墓場だったか」と二十世紀末に、深夜営業のコンビニエンスストアの前を通った時に私の心の奥底から響き湧き上がってきた。その声は父母の田舎である福島から発せられたように、故郷が放射能に汚染されながら二十四時間絶え間なく発電を続ける苦悶の声であったようにも感じられた。有り余る電力によって個人の快適さを追求することだけが、進歩のように倒錯していた二十世紀末の一九九九年に、日本で初めて原発作業員二人が死亡した。その時に詩「一九九九年九月三十日午前十時三十五分」を私は記した。茨城県東海村原発で大内久さんと篠原理人さんの二人が、ウラン溶液をバケツで移動作業をしていて、臨界となりバケツの中にミニ原子炉が誕生し、「青い光」である「チェレンコフ光」という中性子を浴びてしまった悲劇を書かなければならないと思った。中性子は二人の遺伝子を破壊させ八十日以上も苦しめて死亡させた。私が驚いたのは、この悲劇を少し時間が経つと多くの日本人は忘れ去り、原発が本質的に抱えている危険

性を直視しないことだった。また二〇〇〇年六月には元ゼネラル・エレクトロニクス社の保守・点検の技術者であり二十年近くも日本の原発を見守ってきた日系アメリカ人のスガオカ・ケイ氏が、福島原発を調査した時に発見した炉心隔壁（シユラウド）の亀裂に対する内部告発を行った。スガオカ氏の告発した二件だけでなく合わせて二十九件もの問題点が明らかになった。けれどもその事実に基づいた指摘で裁判で負けた東電を含めた電力会社と政府は、それでも隠蔽体質が直らないうちに、批判を受け止めようとしないうちに「原発教団」をさらに強化してしまつたようだった。二十世紀末で福島第一原発一号機は、当初の耐久年数である三十年を過ぎていたが、いつのまにか耐久年数を五十年から六十年に延ばしてしまつた。「消えない火」である原発を冷す複雑な冷却システムを抱え、熱疲労や金属疲労も引き起こしかねない未完成な製造技術であるにもかかわらず、安全神話を独り言のように繰り返す傲慢な体質が、福島第一原発事故への引き金を準備してしまつたのだ。

三・一一以降、広島・長崎の悲劇は、東北・福島へと引き継がれてしまつた。広島・長崎は戦時下だったため未公開だったが、東北・福島は悲劇の舞台は世界中にリアルタイムに発信・公開された。東北・福島の衝撃は、ドイツ・スイス・イタリアの国民に原発を廃炉に向わせた。この三ヶ国の国民は東北・福島の惨状を核戦争の廃墟のように感じたのだと思われる。例えば福島に影響された三ヶ国と連帯して日本人・日本政府は「四国同盟」を結んで、脱原発国家として互いの再生可能なエネルギー技術を交換するような大胆な構想力を持つて二十一世紀を切り拓いていくべきだろう。そんな「四国同盟」に原発・原発を推進してきた国連の五大国はもちろんだが、原発を抱える他の二十数ヶ国を徐々に参加させていくしかないだろう。地球の歴史において巨大地震・巨大津波・四基の原発事故は、起こるべくして起こつたのだ。四つのプレートがせめぎあっている地震国としての宿命の歴史から目を背けて原発を選択し、五十四基もの原発を作り続けた電力会社と原発政策を邁進させた政府、産業界、学者たちなどの責任の取り方は、限りなく重く取り返しのつかない罪を犯したことを自覚して公職から自ら去るべき覚悟が必要だ。原発を推進した者たちは、決して原発の危険性を指摘する者たちと目を合わそうとしなかつた。原発の安全性や経済性やCO₂を出さないクリーンさをひたすら独り言のように繰り返すだけだった。既成事実を作り上げ満州・中国への侵略を続けた大日本帝国大本営参謀の軍部エリートのように、原子力安全・保安院のある経済産業省官僚や東電やその他の電力会社のエリート社員たちは、国民や国土の持続可能な安全と安心よりも予算と利権を守るために原子力を利用していただけだった。仮説にしか過ぎない科学技術の限界を直視しないで、それを絶対化した末路が福島原発事故であり、科学技術のリスク・コミュニケーションを明言しようとしないうちに傲慢さが、決して眼を合わそうとしない科学技術信仰者の最大の弱点だった。

五月二十七日付けの毎日新聞で詩人・思想家の吉本隆明のインタビュー記事が掲載されていたが、そのタイトルは「科学技術に退歩はない」で、救いがたい科学技術の絶対的な肯定論者の言説を垂れ流している。記事は吉本隆明という「戦後最大の思想家」から意見を拝聴するという前提で書かれていて、福島原発を支えていた原子力の科学技術がどんなに人や環境を破壊しているのかを少しも直視していない。思想とは、現実から試されて、苦悩する人びとを勇気づけ、前に踏み出すために精神的な力を与える言葉の力であろう。緊急避難地域の人びとはもちろん、それ以外の多くの人びとでも外部被曝や内部被曝を恐れている現状において、核技術をさらに発展させて原発を肯定しようとする吉本隆明の科学技術の進化的言説は、人類を不幸にさせる科学技術を批判する精神を放棄した思想家失格の発言である。また東京都知事の石原慎太郎は、テレビ朝日の独占インタビューで「原発の安全性はフランスが出来て、日本に出来ないはずはないから、これからも原発を推進すべきだ」と語っていた。この発言の嘘は東北・福島の子供達なら一瞬で見抜くだろう。頻りに地震が多発する国土である日本と頑強な岩盤のフランスを同列に考える発想自体が現場を少しも直視していない虚言だ。石原慎太郎は私が高校時代に読んだ新聞記事で「日本は核兵器を持つべきで、そうでないと強い外交が出来ない」と語っていた人物だ。この程度の見識しかない人物を何期も知事にしてきた都民の多くもまた、福島の民衆の痛みなど他人事なかも知れない。石原の言説は、多くの原発を推進してきた人間たちが地元住民を欺いていた机上の空論の繰り返しで、それを無批判に垂れ流してきたテレビ・マスコミの責任も限りなく重たい。

仮に真の科学技術者がいるとすれば一九七五年に原子力資料情報室を設立した高木仁三郎のように原子力発電の現場を知り尽くして、次のように警告を発していた人物だろう。「給水管の破綻と緊急炉心冷却系の破綻、非常用ディーゼル発電機の起動失敗といった故障が重なれば、メルトダウンから大量の放射能放出に至るだろう」(一九九五年、阪神大震災を受け学会誌に寄稿した論文、「アエラ」より再録) というように福島第一原発を含めた原発の終末の実相を正確に予知していた。これは原発の現場が最悪の事態になると、どのようなことになるかという危機の想像力が働いていたからだろう。毎日新聞の記者や人選をした編集者達の精神もまた、思想家の言葉が生きているか、死んでいるかの価値判断が出来ていないで、吉本と同様に想像力を閉ざし思考停止状態に陥っているように思われる。吉本隆明は東電などの電力会社や原子力官僚たちを結果として弁護する救いがたい科学技術信仰者に成り下がってしまったようだ。原発や原発事故がどんなに恐ろしいかを見聞きした日本人の一人であるにもかかわらず、百万年もの間、放射性廃棄物が存在してしまう巨大原発施設を建設する科学技術の根源的な危険性を予知的に直視し、総合的な価値判断できない吉本隆明は、よほどドグマに囚われた人物だ

う。そんな吉本隆明は、被爆者や被曝者の生涯にわたる苦悩を我が身に引き寄せて考えられない中央志向の考え方のだろう。それゆえ福島の実業や高木仁三郎のような文明の危機を予見した科学技術批判者から何ら学ぶことができない、思想家という名に値しない人物に思える。私が考える本来的な思想家とは、高木仁三郎のように権力や権威におもねることなく、未だ多くの民衆が気付かないうちに、その危機の実相を想像的に受け止めながら、すでに絶望の淵で躊躇っている他者たちには、自らの持てる思维的直観でマイナスの想像力をプラスの想像力に転換し、在ってはならないものを本来的なものに立ち還らせるように自らの言葉で語ろうとする者だ。そしてより良く生きるための精神的な力を自ら実践することで検証し、そんな言葉と行動が一人の思想家の中に幸福に宿っている可能性を生きる者のことを思想家として語りたい。

2

この技術に関して宇宙物理学者の池内了が「技術の見直し」という論考記事を東京新聞六月二十五日付けで書いていたのを紹介しながら私なりに考えてみたい。一九〇三年にヘンリー・フォードによって開発されたベルトコンベヤー方式の自動車生産は、大型化・集中化・一様化という生産方式で、大量生産・大量消費・大量廃棄を実現させた。しかしこの生産方式の延長線上に、無差別大量殺戮兵器も生れてくる。この大量生産・大量消費・大量廃棄の方式が、二十一世紀では行き詰まり、すでに技術の見直しが地殻変動のように起こっているのではないか。危機管理の観点から池内了は「小型化・分散化・多様化の技術への転換」がいま切実に求められていると提唱する。そして各個人がお任せではなく、生産・消費・廃棄をまですべて各個人の生きている場所で見通せるような中央集権的ではない、地方分権的な良さを發揮した考え方に即したものに近づけていくことを主張している。巨大な生産・消費・廃棄を前提とした、天変地異などの危機に脆弱な生産方式ではなく、「小型化・分散化・多様化」こそが地球環境を破壊させないためにも、危機管理が可能なタフなシステムであり、未来を先取りする等身大の暮らしを目指すべきだと語っている。この池内了の「小型化・分散化・多様化」の思考方法こそ、今の大量の電気を必要とし大量生産・大量消費を前提とした、自然を従属させようとする科学技術を転換し、自然を畏敬する心を取り戻し、省エネで本来の人間の幸福のために役立つ、本来の技術の精神の原点に立ち返らせてくれる。将来はその地域を広範囲に破壊する危険性のある原発のような巨大発電を国家が開発させないための法規制が必要になってくるだろう。国家のために過疎地の住民が犠牲になってもかまわないという発想が、原発を推進した人間たちの根底にあった事実を直視して対策を講じなかったから、戦前の軍部のような失敗を原発政策においても繰り返してしまったのだろう。原発メーカーの東

芝は、米国と組んで高濃度放射性廃棄物を保存する施設をモンゴルに作ろうとしていると新聞が報じていた。東芝は、福島原発の多くを製造した原発メーカーだが、これほど日本国内で多くの人がびとや国土や海洋を汚染させた張本人であるにもかかわらず、全く反省をすることもない根拠からの「死の商人」であることを暴露している。地域の電力製造と送電を一体化して独占し、地域住民を買収し続けて原発を作り続けてきた東電のような電力会社も悪いが、未だ不完全な技術の原発輸出を断念していない東芝や日立、三菱重工のような原発メーカーも限りなく悪い。原発を稼働させるために、東芝などの原発メーカーから依頼された下請け会社の社員や派遣社員たちが日常的に被曝し続けながらメンテナンスが四十年も繰り返され続けてきた。そこで被曝した作業員が裁判を起こすと証人になる学者達が因果関係を否定して裁判が長引き原告たちが死んでいった。そんな社員である作業員たちが被曝させながら収益を上げ続けてきた経営者たちは「死の商人」と呼ばれるに相応しい。これを変えるには株主や社員が収益よりも社会性・公共性を優先させて、「死の商人」である経営者たちを解任するか不買運動するしか方法がないだろう。日本の政治・行政・経済・司法・大学・マスコミなどのあり方は、限りなく不透明で、説明責任も当事者意識も欠如していて、世界中から人類が経験したことのない日本の現状を注視されているのに、未来を切り拓いていく想像力も思考力も金縛りにあって閉ざされているかのようだ。

先に触れた、ドイツ、スイス、イタリアと日本などの第二次世界大戦の敗戦国や中立国が、脱原発国家「四国同盟」というような自然エネルギーだけで電力を賄っていく未来の国家像の構想を立ち上げたらしい。そして二十二世紀には世界中の国が脱原発・脱原発国家になるように目差して国家のナショナルリズムを取り除いていく努力を重ねていくしかない。これは日本人・日本政府が覚悟を決めるなら実現不可能なことではない。国連の五大国のように原発に呪縛されている国には人類の未来を委ねることは不可能だろうが、「四国同盟」には可能性がある。しかしそのためには吉本隆明的な机上の科学技術論者、石原慎太郎的な虚言の政治家・高級官僚、東電や東芝などの死の商人たちに責任を自覚させ、蟄居か隠居させることから始めるべきだ。さらに原発を造り出したアメリカのマンハッタン計画の在り様を人類的な視点的な観点で検証すべきだ。そして戦時中であつたからといって数十万人も暮らしていた広島や長崎に原発を投下することに正当性があるかを歴史学者たちに議論をさせて、その統一見解をアメリカ政府に伝えるべきだ。一九五四年にビキニ環礁で実施された水爆実験で爆心から一六〇kmの海上で「死の灰」を浴びて被曝した元第五福竜丸乗組員の大石又七さんの声に真摯に耳を傾けるべきだ。日本政府は米政府の責任を問わず、水爆実験を容認してしまいました。(略)そのために第五福竜丸の乗組員は被ばく者とみなされず、何の援助も補償も受けられなくなりました。家族にも差別と偏見が及ぶのを恐れ、隠れるように暮らし

てきました。(略)日本の原発導入とビキニ事件は大きなかわりがあります。一七年前、NHKで「原発導入のシナリオ」というドキュメンタリーが放送されました。日本側が事件を不問にするかわりに、米側は核燃料の濃縮ウランと原発技術を提供するという取引を、日米両政府は水面下でしていた、というのです。これが事実なら、私たちは日米両政府の取引材料にされたこととなります。核兵器開発のために行われたビキニの水爆実験と原発が一つにつながっていきます。(「しんぶん赤旗」三・一一から日本を問う「死の灰」の怖さ見詰め)

大石さんは、乗組員二十三人の半分以上が被曝と関係ある病気で死亡している事実を伝え、日本政府は米政府とどうして取引をしたのか、被曝者として自分たちをなぜ認めないのかを問うてきた。その根本的な要因に、日米間でビキニ事件を不問に付し、原発技術を日本が得るという密約があったのではないかとというNHKの「原発導入のシナリオ」の説が最も説得力があると語っている。大石さんは六月に出された「風船」十四号(長沼士朗など発行)「東日本大震災に思う」というエッセイの中でも次のように語っている。「東海村の原発とビキニ事件は大きな関わりがあるからです。(略) こともあろうに被った膨大なビキニ被害額やアメリカの核実験容認などを取引材料にして水面下で原発技術や原子炉をアメリカに要求し、東海村に導入したのです。後にアメリカの国立公文書館からそれらの資料が見つかり明らかになりました。」大石さんの言うとおりビキニ事件当時は、反対運動が激化していた。しかししばらく経つと米国は日本政府と取引をしてビキニ事件不問にさせ「平和のための原子力」というアイゼンハワー大統領の言葉を世界に発信していく。日本では利権がらみの自民党の政治家たちが読売新聞社主の正力松太郎などを利用して、原発推進の大キャンペーンを張っていく。また他の新聞も追隨していく。そんな政府・行政・電力会社・マスコミによる経済効率優先と原発のリスク隠しの安全神話よって全国に原発が作られていった。その安全神話の末路が福島第一原発事故だった。

日本政府は大石又七さんたち元乗組員と遺族に情報公開し、事実を明らかにして謝罪し過去に遡って補償をすべきだ。そのような歴史を透明化することが、日本人が脱原発に向っていく一歩となるに違いない。

3

東日本大震災からしばらく経った四月十八日に大阪の詩人島田陽子さんが亡くなられた。数週間前に長電話をしたので、その時のいつもと変わらぬ温かな声は今も耳のどこかに残っていて、二度とお話できないと思うと命の儂さが胸に沁みた。そして一年近く前の電話での話を思い出した。私が『原爆詩一八一人集』(二〇〇七年刊)、『生活語詩二七六八集』

(二〇〇八年刊)、『大空襲三三〇人詩集』(二〇〇九年刊)を刊行し、二〇一〇年八月には『鎮魂詩四〇四人集』を刊行する予定ですといい、来年はもう一つやりたいテーマがありますが、何だか分かりますかと、質問をした。すると島田さんは「戦争や鎮魂の次には、きつと〈命〉でしょう」と島田さんは私の思っていたことをズバリ指摘した。そんな経緯もあり、亡くなる前の電話では、参加して欲しい旨を伝えただ後に、島田さんがいくつもの詩の教室で教えているので、生徒さんに趣意書の入った申込書を配って欲しいことをお願いしたのだった。島田さんは快く賛同してくれて申込書を送らせてもらえることになった。島田さんは癌の治療を継続しておられたが、詩の教室を持続されていた。きつといつも詩の持っている永遠の〈命〉を信じ教室で伝えようとしておられたのだろう。このような島田さんを始めとする詩人三一人が共同著者として参加してくれ、この時代に相応しい詩選集が刊行できたことに対して感謝の言葉を伝えたいと思う。

今回の『命が危ない 三一人集』の編者は、佐相憲一さんが中心になり、宇宿一成さん、中村純さん、亜久津歩さんら若手の詩人たちが力を合わせて、多くの詩人達に呼びかけて参加してもらった。当初は二〇〇〇人の予定だったが、東日本大震災後に、三一人に増やして、震災・津波・原発事故の詩篇を追加公募して最終原稿が確定した。

三一人の詩篇の試みに関しては、四人の編者と南相馬市の詩人若松丈太郎さんに三・一一以降に置かれた自分の立場からじっくりと書いて頂いた。このようにどうか自分の視点で多くの読者にこの詩選集を自由に読んで欲しいと願っている。近代詩・現代詩の原点の詩人である北村透谷は、代表的な詩論「内部生命論」で次のように語っている。「文芸上に理想派と謂ふところのものは、人間の内部の生命を観察するの途に於て、極致を事実の上に具体的形となすものなり」。北村透谷は理想的な詩とは「内部の生命を観察し」ながら事実を突き詰めた果てに生まれるものだと考えていた。どうかテーマに緊急の社会性があるからと言って「これは詩ではない」などと先入観を抱かないで欲しい。どの詩人も透谷同様に「内部の生命を観察し」て書いているのだから。この詩集の言葉は、人間が存在の危機に遭遇した時に、本来の人間の言葉を取り戻すための多様な試みだろう。自分だけの命だけでなく、他者の幸や他者の命の尊さを願ひ、他者の苦悩や葛藤を受け止めながら、他者に寄り添おうとする本当の言葉を目指しているのだろう。

二〇一一年三月一日に震災・津波・原発事故で亡くなった人たちの冥福を祈り、その人たちの想いを未来に反復することを願ひ、この詩選集に収録された一篇や一行が残された人びとの心に希望の火を灯すことを願っている。また現代社会で苦悩し、傷つきエネルギーを喪失している人たち、またもう一度自己課題に向けて挑戦している人たちの傍らにこの詩選集があって、心の糧になり座右の書になって読み継がれてほしいと思う。

あとがき いま、あなたと、ふみだすために

亜久津 歩

七月、東京。夫の額に汗の粒が光る。すっかり夏姿になった雲が、ビルの区切る青空をゆつくり、ゆつくり泳いでゆく。日傘の影から赤信号を眺めていると、胎のなかで暮らし始めて六ヶ月になる息子が、左下のほうへ向けてキックした。今日も元気だね、きみも泳いでいるのかね。

東北地方太平洋沖地震から四ヶ月。いろいろなところで、いろいろなことが起こった。それぞれについて、ここで軽く並べてふれることはかえって失礼に感じるので、控えさせていただく。

わたし自身、具体的な被害を被ったといえるほどの危機はなく、水や食べ物、空気や情報に見えない不安と不信を蓄積させながら、起床し就労し摂取と排出を繰り返して寝床につく「日常生活」を維持している。薄情、と時に過ぎる声は自身のもので、できることにはできるだけ応じるよ、と呟いて目をとじる。胎のなかの「日常生活」を直接、まもってやれるのは、今、わたししかないのだと言いつけて。

そんな想いを知ってか知らずか、彼はすくすくと育っている。二月二十三日には未だ肉塊のようだったのに、三月十一日を越え、二十五日にはすっかり手足も生えそろい、人のかたちをしていた。今のところわたしのからだの一部であることに違いはないはずだが、独自の時間と世界のなか「暮らしている」という表現が、感覚として最もしっくりくる。

——いや、きっと、そうなのだろう。

たまたま、わたしの胎に宿ってくれた彼は、もはや一つの命であり、ひとりの人間なのだ。今、彼が何らかの痛みを感じていても、それを吸いとってやることはできないし、命の危険に晒されたとしても、できるのは病院へ駆けこむか担ぎこまれることくらいで、この命を捧げる代わりにと救えもしない。そう強く、望んでも。

人間とは、生きるとは、そういうものだろう。だが、だからこそ寄りそう。

本書『命が危ない 311人詩集』の「いま共にふみだすために」というサブタイトルが、わたしはすきだ。ある日の編集会議において、今回、呼びかけや編集に最も尽力してくださった佐相憲一さんから、いくつか案をみせていただいた。当初あったもののなかに、このサブタイトルはまだいかなかった。「いま、傷ついているひとに読んでほしい」「具体的な、身体的な痛みばかりが、傷」ということではない。「時事性も重要だが、普遍性も不可欠」「闘っているひとの背中を押せたら」「立ち上がることすらできない、疲れきってしまったころの癒しにもなしてほしい」「当事者だけでなく、一緒にいたいと願うひとにも」「いつかは、また、前を向いて」……話し合いのなかで生まれ、着地したのが、この案だった。

「命」や「痛み」を科学的に分け合うことはできないだろうが、慰められ、癒されるということが、命と命の間には存在すると信じている。たくさんの方の命の声で紡がれた本書が、その架け橋となれば嬉しい。

一方、時には、離れてみることも大切だ、とも感じる。

「家に帰って家族を愛してあげてください」。世界平和のために私たちはどんなことをしたらよいですか、との問いに、マザー・テレサはこう答えたという。世界が幸せばかりでないことなど、いうまでもない。地球の裏側や海の下どこか、そこに停まっている車の中や線路、オフィスビル、住宅街。病院、公園、自分自身。すぐ近くの「命が危ない」いま、むしろ希望こそ見つめづらぬ。生きる喜びを感じ、楽観的であることを、罪悪のように感じることもすらある。つらい時には傍にいる、どんなことがあっても、きみはわたしの子。わが子にはそう伝えたいと決めていたが、それすらも「未来は暗い」という前提に、わたし自身が触まれている現れのようにだ。

無事に出産を終えることができたなら、まずは思い切り笑って抱きしめよう。

この世界が、苦痛か歓喜か、幸か不幸か、どちらかだけになることは、きつとない。それぞれの道で、それぞれの想いを抱きながら、生きてゆくほかないだろう。傷ついたり傷つけられたり、妬んだり拒んだりしながら、それでも、笑い合い喜び合うために、歩み寄り、共にありたい。

終わりに、装幀に関して少し。カバー画は杉山静香さん、表紙や扉の絵は上原恵さんによる描きおろしだ。「命」の文字には写真家・猪又かじ子さんの作品を活用させていただいた。「命が危ない」という名から展開し、浄化と再生、引き継がれ、また新たに生まれくる命と希望をイメージしたものとなっている。

この一冊の詩集が、つめたい何かも、あたたかい何かをも媒介し、一つでも多くの命と命を繋いでくれることを強く願う。いま共に、ふみだすために。